［報告］

井上靖研究会の発足

工藤　茂

去る平成十一年十二月五日、新しい学会が誕生した。〈井上靖文学の研究を推進し、研究者間の交流をはかるとともに井上靖文学を永く後世に伝えることを目的〉とする「井上靖研究会」である。発起人に名を連ねる者の一人として当日の発足の会に出席したので、ここにその報告をしたい。

かつて、ノーベル賞候補のうわさもあった井上靖が亡くなったのは、平成三年一月二十九日のことである。五月六日には満八十四歳を迎えようという年であった。その時からはや九年になろうとしている。没後、井上靖を記念して二つの事業が行われた。一つは、平成四年に井上靖記念文化財団が設立され、「井上靖文化賞」が設けられたことである。その要項に〈この賞は井上靖を記念し、日本文化の向上に資するために、文学・美術・歴史等の分野において優れた業績をあげた人・団体を顕彰するものである〉とある。第一回の顕彰は平成五年に行われ、小沢征爾（指揮者）が受賞している。第二回以降の受賞者は以下のとおり。

第二回　ドナルド・キーン（日本文学研究家）
第三回　陳舜臣（作家）
第四回　白土吾夫と日本中国文化交流協会
第五回　梅原猛（哲学者）
第六回　加山又造（日本画家）
第七回　大野晋（国語学者）

選考委員は大岡信、菅野昭正、樋口隆康、平山郁夫の諸氏。

もう一つは『井上靖全集』の刊行である。新潮社から全二十八巻の全集が刊行され、現在、別巻の刊行を待つ

ばかりとなっている。

井上靖研究会を発足させようという機運が起こったのは平成十一年のことである。七月に広く各位に呼びかけをし、十二月五日に國學院大学本館会議室に於てその会が開催された。参会者は二十名足らずと思われていたのに、五十人を越える人々が集まって、発起人一同ほっと胸を撫で下ろした。

当日のプログラムは次のとおり。

挨拶

会長　荻久保泰幸（國學院大学教授）

井上ふみ（井上靖夫人）

研究発表

井上靖の童話－詩的視座から　宮崎潤一

『氷壁』論－「孤独」と「信頼」　高木伸幸

講演

全集の編集を終えて　曽根博義（日本大学教授）

以上

高木伸幸氏は広島大学大学院博士後期課程に在学する研究者であるが、その発表は優れたものであった。井上自身が言及しているように、『氷壁』は三重県鈴鹿市に本部を置く岩稜会が昭和三十一年七月に発行した「ナイロンザイル事件」報告書を資料として書かれた小説である。その資料を実際に入手して読み、小説と併せて検討した論であった。

宮崎潤一氏（群馬県公立中学校教諭）は『若き日の井上靖研究』（一九九五年・土曜美術社刊）という優れた一冊を持つ研究者である。が、今回の発表は、氏の新しい研究テーマの展望にとどまった。

日大の曽根博義氏は、新潮社の『井上靖全集』の編集者の一人であるだけに、その講演はたいそう興味深いものであった。井上文学を「色彩と音楽」という観点から見た場合、その文学は色彩において優れていること。評論と小説のどちらが井上の文学の特色かというと、小説がそうであるということ。作品の題名をカードに取っていくと、その読みが意外に難しいこと。たとえば「小磐梯」の「小」は「ショウ」と読むのか、「コ」と読むのか。地元の人は「コバンダイ」と呼んでいるが、しかしまた、「ショウバンダイ」ではないかと言う人もいる。

「潮」という字も「シオ」と読んだらいいのか、「ウシオ」と読むのがいいのか。『黯い潮』は「クロイウシオ」だと思われるが、「潮の光」『満ちて来る潮』は「シオ」だろうというようなお話。あるいは、折口信夫、柳田国男と井上文学の関係などについて語られた。そのお話の中に、今度の全集は本当の意味での全集ではないというのがあった。井上さんの作品は非常に多くて、一ページ二段組みにして（全集はそのように組んである）五十巻は必要だとのこと。しかし、出版社にはそのゆとりがなく、全二十八巻、別巻一冊になったというのであった。そのお話を伺って、納得するものがあった。たとえば、私の持っているかつて（株）文藝春秋から刊行された井上靖の長編小説の何冊かは、確かに今度の全集には入っていない。それに、今、文学全集は売れないのだ。

この会に出るにあたって、私も調べたものがある。それは、これまで文庫本に収められた井上靖の作品の中、絶版にされた作品にはどのようなものがあるのだろうかということである。以下そのことについて述べておきたい。

その契機となったのは次のようなことであった。大学の講義で新潮文庫に入っている『夜の声』を使おうと、新潮社に電話をしたら品切れだという。理由を聞いたら年間一千冊以上売れない文庫は、絶版にするからだという。自分が持っているからといって、在庫を確かめずにテキストに指定するのは危険なことだとその時思った。そして今回、絶版になっているものを調べてみようと思ったのである。次に掲げるものは、ちょうどそれとは逆になる、九九年現在出版されている井上靖の作品を文庫の解説目録で確かめたもの。

新潮文庫からは全部で三十六点出版されている。そのうち一九九九年四月現在残っているのは、以下の十九冊である。

『猟銃・闘牛』
『あした来る人』
『敦　煌』
『あすなろ物語』
『風林火山』
『氷　壁』

『天平の甍』
『しろばんば』
『蒼き狼』
『楼蘭』
『風濤』
『額田女王』
『後白河院』
『幼き日のこと・青春放浪』
『少年・あかね雲』
『北の海』
『井上靖全詩集』
『夏草冬濤』（上・下）
『孔子』
『ある偽作家の生涯』『黒い蝶』『詩集北国』『射程』『憂愁平野』『姨捨』『西域物語』『四角な船』『夜の声』『道・ローマの宿』『遺跡の旅・シルクロード』などの文庫本が絶版になっている。

角川文庫では二十九冊が姿を消し、以下の四点だけが残っている。

『真田軍記』
『ある落日』
『化石』
『星と祭』
『黯い潮』『淀どの日記』『満月』などの優れた作品や、『戦国無頼』といった面白い作品が絶版になっているのが惜しまれる。

講談社文庫で残っているのは、以下の三冊である。

『楊貴妃伝』
『わが母の記』
『本覚坊遺文』

文春文庫は二十四点出版されたうち、次の十一冊が残っている。

『おろしや国酔夢譚』
『その人の名は言えない』
『魔の季節』
『白い炎』
『紅花』
『地図にない島』

『戦国城砦群』
『月　光』
『若き怒濤』
『遠い海』
『流　沙』

環境問題が重視されてきつつある今、そのような問題を扱った小説『欅の木』が絶版になったのは、はなはだ残念である。

そのほか、集英社文庫の八冊、中公文庫の四冊は全て絶版となっている。また、かつて九冊ほど井上靖のものを出版していた旺文社文庫は、文庫そのものがなくなってしまった。